【実践報告】

教育実習Ⅱ・Ⅲ（小）の報告

広島文教大学教育学部教育学科
准教授　白石崇人　教授　佐伯育郎
教授　村上典章　講師　長澤希
教職センター　特任講師　小川雅史

はじめに

2021年度は，教育学部教育学科となって初めての本実習であった。そのため，白石が主担当を務め，教育学科の教育課程に適合した実施方法を検討しながら，実習を実施した。

本科目は，小学校教員を目指す学生が，実際の教育現場に出て４週間（実質20日間）の観察･参加･授業実習を行う。実習を通して，子どもの実態を理解し，現場の教員と学校の実態，地域との関係等々を体験的に理解するとともに，教師としての使命を自覚し，教育に対する意欲を高め，教師として必要な資質能力の向上に向けて自己の学習課題を明らかにすることを目的とした。履修者数は両科目とも76名であった。

本科目の到達目標は，次の７項目で設定した。①教職に対する自覚，②児童一人ひとりの価値の尊重，③他者の理解と自己の変革，④教材研究，⑤授業展開，⑥児童の集団活動の理解と指導，⑦事務･実務能力である。この７項目で実習校に実習状況を評価していただいた結果に，事前事後指導を踏まえて課題に取り組んだ結果を加えて，総合的に評価した。

なお,本年度より「教育実習記録」の大幅改訂を行った。とくに,「教育実習日誌」と「授業観察記録」について，これまでの文章表記中心の様式から，事実表記中心の様式へと改訂した。

1　2021年度の事前事後学修スケジュール

時期	主な内容
4/ 9㈮ チューターＧ	後期の実習期間（９～11月）の時間割について説明。 補講予定コマ，教養科目・中等専攻科目・下級学年科目の履修上注意等
7/ 7㈬育心	【育心プログラム】 後期確定スケジュール（事後学修），グループ・班編制，目標作成開始
7/14㈬Ｖ	【直前説明会】 事前訪問・実習中のこと，提出書類配付（実習記録含む），日誌書き方
7/29㈭Ｖ	【実習Ⅰ後】　班打ち合わせ，仮テーマ報告
実習まで	・訪問指導担当教員への挨拶（実習目標提出） ・模擬授業，教材研究，指導案，教育研究（仮テーマの事前研究）など ・実習校との直前打ち合わせ

8/25 ～	実習開始　(11/22最終予定) 　事後学修予定 　A（36人）：①10/18㈪V　②班（中間報告書提出）　③11/ 8㈪V 　B（20人）：①11/ 8㈪V　②班（中間報告書提出）　③11/26㈮V 　C（22人）：①11/26㈮V　②班（中間報告書提出）　③12/10㈮V 　※Glexaに中間報告書を掲示し，掲示板を通した質疑応答の場も作る
12/24まで	実習記録・最終報告書の提出 ※班の議論を参考にして研究をまとめたものが最終報告書となる（方法，教材，子ども，教員，学校の問題について，班の討議や資料調査などを通して深く認識し，自分の課題・解決策を探る）
２月～	実習記録・最終報告書の返却

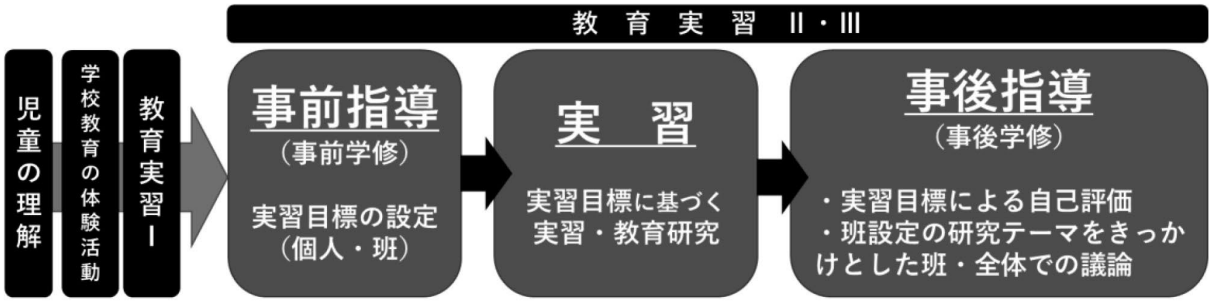

図　広島文教大学教育学部教育学科の実践科目と教育実習ⅡⅢのつながり

2 事後学修会の活動

本年度は新型コロナウイルス対策のため，履修生全員や上・下級生が集まって行う報告会形式の事後指導は行わなかった。実習期間によって履修生をＡ・Ｂ・Ｃの３グループに分け，各グループが２コマの学修を行えるように計画した。また，各グループで３～５人ごとに班に分け，18の班を編制してグループ学修をした。

活動は，個人で学修する活動と班で学修する活動をそれぞれ設定し，かつ両活動がお互いに関連し合うように，そして事前学修と実習，そして事後学修の諸活動が連続していくように計画した。例えば，事前学修では，まず学生個人が自分の実習目標を立て，それを班に持ち寄って議論して班共通の研究テーマを決めた。各自その班の研究テーマをもって実習に研究的に取り組み，第１回目の事後学修会で班の研究テーマをきっかけに実習経験を共有・議論してテーマの研究を深めた。その後，班での議論を「中間報告書」（A4用紙２枚分）にまとめ，Glexaに設けた掲示板で共有し，お互いに意見交換する場を設けた。「中間報告書」は班ごとに１つ作成した。学生には必ず１つ以上コメントするように指示した。第２回目の事後学修会では，班でGlexaのコメントを共有してどのように回答するか相談し，「最終報告書」を仕上げる準備を行った。「最終報告書」（A4用紙２枚分）については，班のテーマや議論を踏まえて個人で取り組む課題とし，実習で学んだことについて自分の実習経験を中心にしてまとめることを課した。

3 今後の課題

（1）実践科目の連続性・系統性の強化

本科目は教育学科の実践科目である。１年後期「児童の理解」，２年通年「学校教育の体験活動」，３年前期「教育実習Ⅰ」における学びを有機的に引継ぎ，実際の学校現場において発揮させることが必要である。しかし，学生の学び方を見ると，これまでの実践科目の学びが十分生かされていなかった点が課題として残っている。特に日誌作成については，「児童の理解」「学校教育の体験活動」で基本を学び，実地で演習したはずだが，その学びが本科目の「教育実習記録」の記述に生かされていない学生が多くいたことである。１・２年次からすでに「教育実習Ⅱ・Ⅲ」の日誌作成を意識した学修を工夫していく必要がある。「教育実習Ⅰ」の学びについては指導案や「授業実践記録」に十分生かされていたが，個人差が大きいので，学生全員の力量向上を目指して今後も学修を工夫していきたい。

（2）全実習期間３か月（９～ 11月）から２か月（９～ 10月）への短縮

教育実習Ⅱ・Ⅲの実施時期について，なるべく９月・10月，または11月の早いうちに全日程終了するように，科目担当教員・学生・教職センター職員とで方針を共有した。これは，学生が実習中に実習以外の科目を長期間欠席しなければならないという問題を解決するためにとった方針であった。「学生の学習権保障」にかかわる問題であるため，今後も，実習先の学校・教育委員会と相談しながら実習日程を設定していかなければならない。

（3）事前指導のあり方―目標設定

今年度は，事務連絡だけにとどまらず，実習の質向上につながる事前指導を目指して工夫をこらした。まず，実習目標の作成について，自分の関心や個人的課題を目標化するだけでなく，班で議論して研究テーマを立て，それを目標化するようにした。それを事後学修における議論のきっかけにして，事後指導と連続するように工夫した。ただ，事前指導の時間が不十分だったため，実習目標作成の意義を十分理解できない学生がいて，目標・テーマ設定を自分の事として自覚不十分なまま目標設定に取り組んだ学生が見られた。時間には限りがあるが，ただの事務連絡ではなく実質的に「実習の事前指導」にしていくには，事前指導の時間の設定数を増やすことを今後検討すべきである。また，実践科目の系統性を強化し，例えば，実習Ⅱ・Ⅲ以前の実践科目の時から目標設定の意義を体験的に学修して，引き続いて実習Ⅱ・Ⅲの目標設定に取り組めるような課程を編成する必要がある。

なお，学生が個々に設定した実習目標を学生の実習中の学修に十分生かせなかったことが反省である。学生には目標の例を示してその目標設定を支援したが，この時に「教育実習自己評価票」とのつながりをもっと強調すべきであった。学生に示す目標例を「教育実習自己評価票」の項目に対応させることが今後必要であろう。

（4）改訂版「教育実習記録」による学修効果

今年度は，実習期間中の学生の学修時間を効率化するために「教育実習記録」を改訂した。毎日の課題として「教育実習日誌」と「授業観察記録」を中心に課すが，とくに「教育実習日誌」の文章記述の欄を短くし，「授業観察記録」の欄を長くした。授業の事実をより多く把握してその意図や意味を解釈・考察する機会を増やすねらいだったが，実際の記述では，ただ事実を把握しただけにとどまる学生が目立った。ただ事実を羅列すればよいのではなく，事実の意味を解釈することが大事であることを，もう少し事前指導で強調すべきであった。日誌の様式についても再検討して，学生の事実解釈・考察を促すような工夫を加えたい。また，「児童の理解」や「学校教育の体験活動」における日誌作成の学修が「教育実習Ⅱ・Ⅲ」の日誌作成に効果的につながるようにしたい。今後は，実践科目の担当者同士でもっと情報共有して，必要な事前指導を計画していくことが必要である。

なお，「授業実践記録」については「教育実習Ⅰ」の学修がよく生きていたと思われる。

（5）事後指導のあり方―協働的学修を促す仕組み

事前事後指導では協働的学修を促す仕組みを構築することに留意したが，今年度は新型コロナウイルス対策のため，事後学修会を報告会形式でなく，小グループ学修の形式にした。ただ，コース全体での協働的学修の機会を失わないように，質疑応答を挙手発言形式ではなく，中間報告書をGlexaで共有してコメントを付けるオンライン形式にした。これにより，報告会・挙手発言形式だといつも質疑応答が熱心に挙手する特定の学生に限られがちだったが，コースの全学生が質疑応答に加わることができた。しかし，コメント数は増えたが，多くが浅いコメントで満足してしまったり，コメントを書くことが目的化してしまって議論や理解の深化に意識がいかなかったりした点に課題が残る。もしこの形式を続けるのであれば，科目担当教員が率先してコメントしてモデルになることや，コメントの応酬を推奨すること，コメントを拾い上げての吟味など，もうひと工夫を考える必要がある。

また，班での議論については，熱心に議論して実習での学修理解が深まっていく班と，すぐに議論が尽きて表面的な理解にとどまる班とに分かれた。第１・２回の事後学修会における班学修の間，科目担当者が机間巡視をして適宜助言していったが，学生や班の事前事後学修に差があるように感じた。学生個々や各班が，事前に研究テーマをどれほど真剣に議論していたか，実習経験をどれほど深く理解してきたかなど，学生の実習課題の取り組み具合によって，班学修の深まりが分かれるのではないかと思われる。例えば，班の事前・事後学修の状況をチェックする仕組みを設けて必要な助言を加えるような工夫が必要である。

（6）単位認定に関する評価

今年度は，実習校の「教育実習評価票」を基礎として，「教育実習記録」の内容と事前事後の学修・提出課題とを参照して，単位認定に関する評価を確定させた。実習校による「教育実習評価票」の内容と学生本人による「教育実習記録」の内容との認識をすり合わせた。特に，「教育実習評価票」がＢ判定の学生については，科目担当者のところで判定基準をそろえて「教育実習記録」の内容を確認し，実習校の判定が「妥当」か，それとも「優れている」と判断すべきか吟味することに留意した。今後も確認していく必要がある。